
ミッシング・リンク 1

榎 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミッシング・リンク 1

【Zコード】

Z8872C

【作者名】

檻 麻容

【あらすじ】

葵と十夜は一日旅行に出掛けた。それは普通の旅行のはずだったが、不思議な現象が起こっていく。二人が気付かないまま、運命の歯車は動き出していた - - <オムニバス形式>

1・朝(白)

長い迷路で迷うのは容易い。
しかし、一直線の道を歩くのが難しいと感じるのは何故だろ。

1 白と黒

出かけよう。ガラス瓶を持つて。

「あつ チューリップだ」

葵は弾んだ声で指差した。足取りも自然と軽くなる。

目の前は、全ての色を使って織り出されたかのような花々で溢っていた。それは、春という最大限に自分の美しさを出せるこの時期に、誇りを持っているように咲いていた。咲くのは義務ではなく、誇りの問題なのかも知れない、と葵はいつも思う。子孫を残すためだけでなく、花であることを、美しいことを誇りに思つて、咲く。

葵は自分の思考にくすりと笑い、一面色とりどりの花でいっぱいの中でチューリップの方へと走つて行つた。葵の手にはガラス瓶があつた。形はドレッシングボットに似ている。無色のガラスだが太陽の光を反射して光り、空の青を吸い込んで映していた。ガラスの微妙な曲線が光を巧みに誘導し、時折七色に見える。その瓶は、密閉するようにコルク栓がしつかりと閉まつていた。

葵の後を追うように、ゆっくりと歩く十夜はガラス瓶を指して言った。

「何を入れる?」

「えっと・・・花! チューリップを入れよう」

葵は咲き乱れるチューリップの中から白いチューリップを選んで花だけを取つた。『めん、と小さく呟く。

手の中には、まだ開ききってはいない花が乗っている。薔は隠れた力を秘めているようで葵の一番好きな形だった。どんな風に咲くのか見ることができないのが残念だったが、未完成のままでも綺麗だった。

そして、白は十夜の好きな色だった。しかし、何故か十夜は黒の服を好んで着る。今日も例にもれず黒を基調とした服装だった。黒は全てを吸収して無にすることが出来るから、と十夜がポツリと漏らしたのを葵は聞いたことがあった。白は吸収するとその色に染まってしまう。矛盾しているけど、なんとなく葵にもわかつた。自分が持つていらないからこそ憧れ、好意を持つ。

「白？ いいワケ、それで」

十夜は淡々と、確認するように言った。たくさんある中で白を選んだのが自分の為だとしたら、と氣にしているのが声に表れている。十夜は葵の好きな色は青だと知っている。始まりは一番大切なもので、始まりがあつてこそ終わりがある。その始まりを自分に合わせていいいのか。十夜がそう危惧していることを、葵は察した。

葵はチューリップをガラス瓶の中に入れ、コルク栓を閉めて上へ掲げて透かして眺めた。

「うん、始めは白がいいね」

十夜の方へ振り向き、笑った。にっこりと、本心からの笑みで。十夜は微笑し、葵の隣へ行つた。そしてガラス瓶を覗き込んだ。白の背景には青があつた。空の青の中で映えるチューリップの白。純粹で汚れのない白。だからこそ憧れる、白。

「始まりの色・・・か」

呴いた十夜の声はチューリップへ届いたように見えた。声に反応したかのように、チューリップが少し開いた。自分の美しさを見せるように。少しだけ秘密を見せるように。

それを見ていた葵はにっこり笑つてコルク栓を閉め、勢いよく十夜の方へ体ごと向いた。

「次は何処へ行こうか？」

2・畠(青)(前書き)

青空の下、一人は青い鳥を見た。ただ通り過ぎていつただけの青い鳥。しかし、鳥は『何か』を残していつた気がした。『青い鳥』が残したものとは。それは布石に過ぎなかつた。

2・昼(青)

心地良い風が吹き抜ける。

押し寄せては引く波のように草がなびいていた。

どこまでも広がる草原。周りは木々で囲まれていて、空気は清らかだった。呼吸をする度、体中に染み渡る。

「何処から吹いてくるんだろ・・・この風」

風を正面から受けた葵は呟いた。十夜は風の抵抗をあまり受けないように横を向いていて、揺れる髪を左手で押さえた。手の間からこぼれる髪は、太陽の光で輝き、稻穂色に変化していた。

そして、琥珀色の瞳だけを葵の方へ向けて言った。

「海の方からみたいだ。潮の香りがする」

「あつ本当だ。近くに海があるのかな」

葵は右手を額に当て、遠くを見るような格好をした。日光が遮断されて少しだけ視界が広がったように思えた。しかし限界があるのは仕方がない。世界の果てまで見たいと切望することもあるが、それは実際行くことで満たされる。出来れば十夜と一緒に見ていいたい。

今、視界に広がるのは草と木と空だけだった。木々を抜けると海があるのだろう。風が海の匂いを運んで来る。少し湿気を含んだ海特有の風は肌に張り付くが、葵はその感じが嫌ではなかつた。海は懐かしい、故郷のようなものを感じさせる。事実、葵は海で生まれた記憶を持っていた。

「十夜。次、何入れようか?」

少し弱まつた風に背を向け、後ろにいる十夜を見た。十夜はある一点を凝視していた。葵の声も届いてはいない。

葵は十夜の顔を覗き込み、もう一度呼んだ。

「十夜?」

「青い・・・鳥」

その言葉を聞き、すぐに葵も同じ方向を見た。

空の青の中にある一つの黒い点。小さな黒は確かに青を含んでいるように見えた。それはだんだん大きくなり、はっきりと色がわかつた。青だ。からうじて空と区別ができる青で、目を離すと溶けていつてしまいそうだつた。一度太陽の中に入ってしまい十夜は鳥を見失つてしまつたようだつたが、葵には見えていた。あの青は、見たことがある。

葵は鳥のいる方向を指した。

「青い鳥つてあの幸せの青い鳥かな？」

葵は目線は鳥から動かさないで、隣に並んだ十夜に訊いた。

葵が青い鳥で思い出すのは童話だつた。『幸せを運ぶ鳥』という夢みたいな存在は、現実にはないのかもしない。だけど、夢を見ていたかつた。サンタクロースだつて世界のどこかに存在するのかもしない。

葵は、『夢のあるモノ』を肯定しないが、否定もせずに心に留めておいていた。あつたらいいのに。その存在を、心の中に存在させていふ。

「青い鳥が全部『幸せの青い鳥』だとは限らない。いや、『幸せの青い鳥』はいのかもしない。でも・・・今はあの鳥が『幸せの青い鳥』であつてほしいと思つ

強い気持ちを込めた十夜の声に、葵は微笑んだ。同じ気持ちだつた。感じ方が似てゐるから、同じであることが多いから、隣にいることが不愉快ではない。双子のような錯覚を覚えるほど、近い存在だつた。

青い鳥はゆっくりと二人の頭上を飛び去り、潮の香りがする方向へ飛んで行つた。ついておいで、というよつて。導くよつて。望んでいたモノが現実になるかも知れないという期待が湧いてくる。

鳥は木々の中へ消えるように見えなくなつた。見えなくなるその瞬間まで、二人はその場を動かなかつた。いや、動けなかつた。磁石がくつつくように足は地面に張り付いていた。

「葵……あれ」

ほとんど風が無くなつた中、何かがゆっくりと落ちてくる。それはあの鳥の羽根だつた。空の色によく似た青が、自分に向かつて落ちてくる。

十夜はふわりと落ちてくる羽根を軽く跳んで左手で素早く取り、葵の方へ向けた。

「幸せの青い鳥だつたみたいだ。ほら、こんなにも嬉しい気持ちにさせてくれる」

「うん……」

二人は何も言わず、ガラス瓶の中に羽根を入れた。チューリップと羽根。白と青。それは本当に互いを映えさせていて、美しかつた。どんな宝石よりも。

3・夕方（茜）

すべては茜色に染まつていった。木も、空も、そして二人も茜色に塗り替えられていく。森に入ると、夕日が木漏れ日のように細い筋を創つていた。それはあと少し時間が過ぎると消えてしまう、限られた芸術で。限定されているから一層輝いて見えるのだとわかっている。それでも、眼は幻覚を映す。

葵は感嘆の溜息を吐いた。

「十夜、ほらガラス瓶も染まつてる」

葵が掲げた透明なガラス瓶も夕焼け色に染まつていた。全ての色に塗り変えることができるガラス瓶は、全ての色を許し、受け入れることができる。

白のように受け入れ、黒のように無にする。両方を兼ね備えた性質は、二人の目標に一番近かつた。

「でも、チューーリップと羽根は変わつていらないね」

先を歩く十夜は葵の声で立ち止まつた。そして振り返り、数歩戻つた。ガラス瓶の中で白と青だけが鮮やかだった。何の影響も受けずには存在する。

「本当だ・・・なんでだろ」

「強い思いを込めた物には、その色しか表れないようになるんだ」

二人は同時に声のした方へ向いた。夕暮れの森に一人以外誰かがいるとは思わなかつた。目の前に立つていたのは同じ年くらいの少年で。

夕焼け色に染まつていなかつた。

少年は昼と夜を持ち合わせているかのようだつた。髪は夜の空で瞳は晴れた昼の空の色で。一つ一つが完璧で、人形のように美しかつた。しかし生きているというのが瞳の輝きで感じられた。生命が宿つている、強い瞳が葵の視線を捉えた。

少年は一人の方へ軽い足取りで近寄つた。

「何故、俺が茜色じやないのかつて顔をしてるな」

微笑した少年は葵の前に止まり、葵の腕を取つた。そして、ガラス瓶を覗き込むように自分の顔の前へとやつた。

葵は触れた少年の手から伝わる何かに焦点を合わせようとした。十夜に似ている空氣。雰囲気とは違う本質を映す気が、十夜と同じモノだと感じる部分があつた。葵は自分のこの、人の性質を読み取る能力を特別なモノだと思ったことはなかつた。皆持つている能力だけれど、それを自覚していないだけだと思っている。本能で、人付き合いはできる。

ふと視線を感じて顔を上げると、少年とガラス瓶を挟んで目が合つた。

「言つただろ？ 強い思いを込めた物にはその色しか表れないって。俺は強い思いを自分に込めているから染まらない。でもそんなこと俺以外は出来ない。だつて自分の全部は信じられないだろ？ さあ、どうすればいい？」

ゆつくりと葵の手を離した。そのままの状態で止まつて いる葵の手。

葵はガラス瓶の少年をじつと見、ゆつくりと目を閉じた。少年の言つている意味はわかる。強い思いはいわば錯覚を起こさせる。視界なんて脳の働き一つでどうとでも変わる。幽霊の正体見たり、枯れ尾花ということだ。つまりは先入観さえなければいい。夕日に影響されると思うことが今の状態を作つて いるのだから、何も考えなければいい。そう、無心であればいい。

目を開けた時、ガラス瓶に映つて いたのは十夜だつた。原色の十夜が存在した。

葵はホツと溜め息を吐いた。難しく考える必要はなかつた。葵は知つて いる。十夜がどんな色を持っているかなんてわかつて いる。夕日になんて負けない、綺麗な原色を思えばそれで良かつた。

十夜は葵と少年の間に立つて、葵に向かつて微笑んだ後、少年の方へ向いた。

「答えは簡単。互いを認識すればいいんだ。互いを思えばいい」
その答えに満足したように、少年は頷いた。その顔は心から喜んでいるようだつた。その答えが欲しかつたのだと暗に示していた。葵はふと不思議に思つた。認識なんていつもしている。しかし、原色を保てなかつた。

「でも・・・何故先刻まで・・・」

「気付いてなかつたからさ。深層心理だな。互いを認識していくも心の奥深くにあつたら駄目なんだ。無意識は力にならない」

そう言つと少年は、右手を空にかざした。手品か何かのよう、元手に飴玉らしきものが現れた。

透明なビニールに包まれた透き通る茜色の物体は、茶巾包みのよう紐で一つに縛られていた。

これにも思いが込められているのだろう。はつきりと、その色を表していた。夕日を吸い込んだ色が、手の中で揺れている。

「気付いた」褒美。これは何色に見える?」

「茜・・・」

眩いた葵の手に飴玉を乗せた。硬く、ヒヤリと冷たい感触に、葵は何故か心が落ち着いた。知つてはいる温かさが体を満たす。それでもう一つ、逆の手から出した物を十夜に渡した。

「これは何色?」

「黒・・・これ、飴玉じゃない?」

ビニールを解いて中身を出した。黒曜石のような球体。それは葵の瞳そつくりの色で、十夜の表情は緊張が解けたように穏やかになつた。十夜は今まで無意識の内に体が硬くなつていていたのに気付いた。警戒していたのではなく、緊張していた。その理由を掴むことはできなかつた。

「そう。ビー玉だ、ただの」

少年は一步下がり、二人が視界に入る位置に立つた。そして、澄んだ、よく通る声で言つた。

「願わくは、君達に幸があらんことを」

そう言つと、少年は来た方向へと歩き出した。ゆっくりと、軽い足取りで。もうやるべきこと、言つべきことは言い終わったとでもいつよひ。たゞいつ。

一人は顔を見合させ、同時に言つた。

『ありがとう』

少年は振り向き、一瞬驚いた顔をしたが、すぐににっこりと笑つた。そしてまた歩き出した。左手を振りながら。

葵と十夜は少年が木々に紛れて見えなくなるまで見送つた。見えなくなるとまた顔を見合させ、笑つた。そしてビール玉をガラス瓶に入れた。

吹き抜けた風は、潮の香りと混じつてラベンダーの香りがした。

4・夜(黒)

森を抜けると一面海が広がっていた。

視界は月光に輝く波の筋と、空に無数に散りばめられた星で占められていて、まるで孤島にいるようだった。

葵は砂浜に出て、波打ち際まで行つた。波が一定のリズムで押し寄せてくる。

「今日の旅はもう終わりだね」

ゆっくり後ろから歩いてくる十夜に向かって、ガラス瓶を掲げて言った。十夜は月光に照らされて、十夜ではないように思えた。月は人を惑わす。そして、それを甘んじて受け入れる自分がいることに葵は失笑した。

「ああ・・・だけど、本当の終わりではないから」

追い着いた十夜はガラス瓶を受け取り、コルク栓を開けた。そして、海の水を半分くらいまで入れ、閉めた。

「思い出つて続きがあるなら残すべきではないんだ。一つ一つは大切だけど、本当に必要なら心に残るはずだから。だから、これはここに置いて行かないか?」

月が映し出されたガラス瓶。中では海水が揺れ、チューーリップ、羽根が漂っていた。一つ一つが鮮やかに、本当の色を出していた。強い思いがそのものを生かすことができることを知った今、全てのモノは原色で存在していた。月光が眞実を浮き彫りにする。葵は微笑み、力強く頷いた。

「うん、それがいいね。旅が続く限り、思い出は心に積もるから」
ゆっくりと手を伸ばし、ガラス瓶を持つ十夜の手に両手に重ねた。ビー玉と同じ温度。葵はビー玉の、あの酷似した温度は十夜のモノだったのかと理解した。ビー玉は、お互いの性質を反映していた。

「空の色が揃つたね」

「そう・・・夜明けの白、晴天の青、夕暮れの茜、夜の黒」

言い切った瞬間、発光と同時に全部の色が混ざった。海水に溶けるように、一つになつた光はガラス瓶の中で浮いていた。
それはちょうど手の平に収まるサイズで。葵は瓶を包み込むように両手を翳した。

「光・・・？」

「つうん、星だよ」

葵はそう言い、コルク栓を開けた。光はゆっくり、少しずつ空へと浮いていった。夜の空の一つの星になるように、螢のようにふわりと浮上する。

「ほら、星だつた」

「ああ。還るべきところに還つたんだ。僕達の思い出として遠ざかる星は、他の星に混じつて空の一部となつた。そして、二人は夜の闇に紛れて、原色ではなくなつた。認識していないわけではない。今日の思い出を心の奥にしまつたからだつた。

「十夜、きっと僕達はあの星を探すことができるよね」

「当たり前さ。なんたつて僕らの星なんだから」

空っぽになつたガラス瓶を一人で海に流した。
次に始まる旅に向けて。

月が、人を惑わす。そして、本能が呼び起される。

「そうか・・・もうすぐ始まるんだね」

葵の咳きは風に溶けた。十夜とは五メートルほど離れていた。十夜に声が届かなかつたことに安心し、葵は額を左手で押さえた。

チクリと頭が痛む。前頭葉に鋭い痛みを感じるのは覚醒した印だつた。証拠として、右手に幾何学模様が浮かび上がる。覚醒の時期は今頃だつた、と初めて認識した。押し込められていた記憶が溢れ出す。良いものも、悪いものも、全ての記憶が頭を占めていく。最後に残つたのは一番近くにいた五人の顔で、あの『会議』の記憶だつた。一言一句、誰が何を発言したか正確に言える自信がある。その『会議』で決まつたことを、今ではなかつたことにしたかつた。永遠に続くと錯覚してしまつから終わる時に失望する。望んだのは自分のはずなのに、と葵は後悔した。永遠に続くと錯覚してしまつから終わる時に失望する。望んだのは自分のはずなのに、と葵は後悔した。不变なモノなど数少ない。それなのに、『不变なモノ』の中に自分を入れてしまつなんて馬鹿なことをした。

決心が変わる可能性を考慮しなかつた。『決心が変わる』ものと出逢うことなんて考えられなかつた。今まで、そんなことがなかつた。そんなことがあるはずがない、と思つていた。しかし、その『可能性』は限りなくゼロに近づいても存在していた。それに、気付けなかつた。

今さらもう止めることはできない。運命の『プログラム』は動きだした。

葵は右手の模様を、左手を乗せて消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8872c/>

ミッシング・リンク 1

2010年10月8日15時43分発行